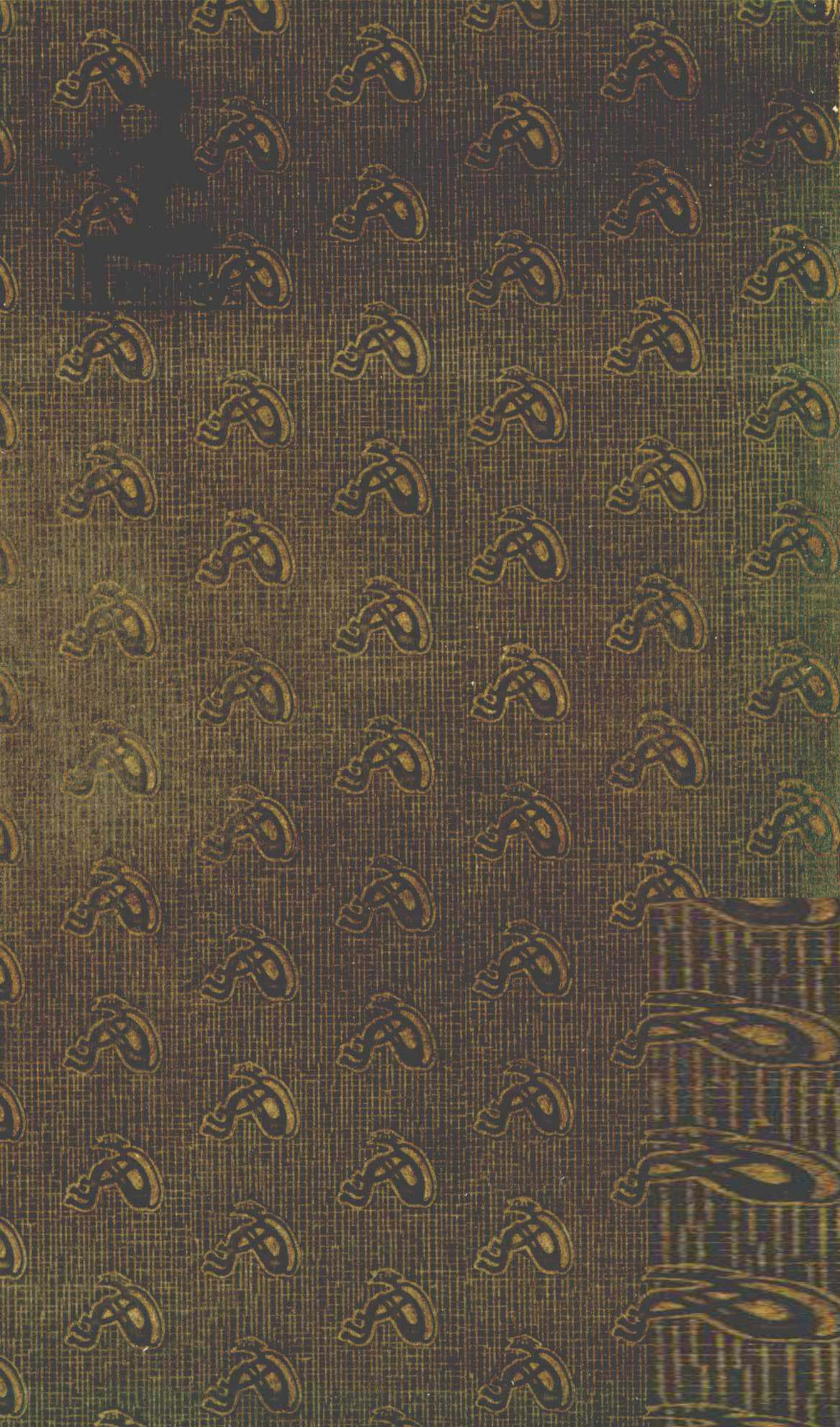


読者へのお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九
光文社出版局
神吉晴夫

長編推理小説　白いめまい

昭和36年12月1日　初版発行

¥ 250

著者　島内透（しまうち とおる）
東京都大田区入新井1—187 小関方

発行者　神吉晴夫

印刷者　山元正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所　東京都文京区音羽町3　株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　〔明泉堂製本〕
表紙の模様・意匠登録　116613
© Tooru Simauti 1961

白いめまい

島内透（しまうち とおる）

目次

第一章　春たけなわ……五
第二章　白いサンダル……二一
第三章　二世一家……四六
第四章　ミシシッピー……七一
第五章　国有財産の払下げ……九八
第六章　江東区東陽町……一三九
第七章　白いめまい……一七七
第八章　細雨……二一八
第九章　クラブ・マルマラ……二五六
第十章　みさご荘……二九二
第十一章　三枚の写真……三二三
第十二章　屋上……三六四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さしえ・和田誠

第一章　春たけなわ

1

東京の街には春がたけなわだった。幾重にも重なりあった大小のビルは、やわらかな陽光にきらきら輝き、さわやかな微風が、ビルのあけはなたれた無数の窓辺にやさしくささやいていた。メイン・ストリートに溢れる車の騒音は、蜜蜂の唸りのようにどこまでも遠く小さくひびき、四本のテレビ塔が、この巨大な街の避雷針さながらに霞んだ空高く光っていた。そして、そのはるか上空には、排気ガスの白い尾をひきながら、小さなジェット機がいくつも舞っていた。

北村樟一はかたい椅子のなかで眼をさました。両手を思いきり伸ばしてあくびをしながら、うす暗い事務室のなかをそっと見回した。汚れた灰色の壁に、疵だらけの木の床、緑色のブラインドのおりた一間の窓。家具は、名ばかりの書類戸棚に事務机が一脚に、椅子が三つ。その椅子のひとつは、北村のからだでふさがってい

る。事務机の上には、緑色の電話機とやはり緑色のガラスの灰皿があるきり。私立探偵という稼業にふさわしい、四坪たらずの殺風景な部屋だ。壁の電池時計が十一時五分をさしている。

部屋のなかは、北村樟一が二時間前に出勤したときとなにひとつ変わったことが起きていなかった。なにひとつ、位置を移動させたものもない。いや、たったひとつだけ動いたものがある。電池時計の二本の針だ。

北村は思いきり伸ばした両手を頭のうしろで組み、椅子にすわったまま、頭と腕の体操をしようとした時、机の上で、緑色の装飾品のベルが鳴った。北村は左手で受話器をとった。

「なにしてらしたの」からかうような若い女の声がいった。岡田由紀子の声だった。一日に一度はかならずかかってくる声の定期便だ。

「当ててごらん」と北村はいった。

「また居眠りしてたんでしょ」

「ちがうね」

「じゃ、なにしてたの」

「ほんとに眠ってたよ」

「まあ！」岡田由紀子は明かるく笑った。「電話のベルで眼がさめたのね」

「そんなとこだ」

「今日も開店休業ね」

「休業はしていないさ」

「だって、お客さまがなきゃ……今日も、まだだれも来ないんでしょ」
「いや、来たよ。朝から二人来た」
「あら、お客さまあったんですの」
「客とはいわなかったよ」
由紀子はくすくす笑った。「わかったわ。一人は掃除婦さんで、もうひとりは……郵便屋さんね」
「そこらへんだな」
「郵便屋さんなら、午後もう一度来るわ。けさはなにかいいお便り持ってきて？」
「うん。電話料の請求書を一通だけ……」
緑色の受話器のなかで、由紀子の声が手を打たんばかりによろこんだ。「やっぱり開店休業だわ」
「君とおなじさ。今日は学校はどうしたの」
「今日はお休みよ」
「学校は毎日やってるし、教授も毎日講義をしてるが、学生の君は毎日休みなんだな」
「北村さんを見習ってるのよ。八年も学校にいた大先輩をね」
「ぼくは学生時代には、学校には努めて出るように心がけてたものだよ」
「でも、教室には努めてはいらないように心がけていたのね。……これから、銀座まで出ようと思ってるの。遊びに行こうかしら」
「歓迎する。ただし、手ぶらでなければね」

「ひどいわ。わたしより、お土産のほうが大事なのね」
「しかたがないさ。人間はつねに新鮮な刺激を要求してるんだから……」
「いいわ。そんなことというなら、わたしも勝手に新鮮な刺激をさがすから」
「君にちょうどいい刺激を資生堂で売り出した。もちろん化粧品じゃない。食べものだ。いや飲みものかな」
「どんな飲みもの？」
「ソルベ・ド・バナーヌといったかな」
「シャーベットね。バナーヌって、なに？」
「さあ、なにかな。フランス語らしいが……」
「知ってるわよ」唇をとんがらかしたような声だった。「下品なことばかりいって……」
北村は楽しそうに笑った。
「文句があるなら、資生堂にいうんだね。バナナ・シャーベットを売り出したのは、資生堂なんだから」
「また、口から出まかせいって。ソルベ・ド・バナーヌなんてフランス語ないわよ」
「そうかね。ぼくの専門の外国語は、あいにく、ギリシャ語とアラビヤ語なんでね」
「ひとをからかってばかりいるのね。いいわ、もう明日から電話なんかしないから」
「そりゃ君の勝手だが、まあ、むりだろうね。いまはそう思ってても、明日になれば、君の手が自然に電話にのびて……」
北村が言い終わらないうちに電話が切れた。岡田由紀子は本気で怒ってしまったものらしい。北村は笑いな

から受話器をおき、壁の電池時計に眼をやった。岡田由紀子は妙なところで電話を切ってしまったが、それでも、たあいもないおしゃべりのおかげで、四分ばかりのあいだ、退屈しのぎができたというわけだ。北村は机の引出しからうすい文芸雑誌を取り出し、たいして読む気もしないページを繰った。

2

机の上の電話がまた鳴った。北村樟一は読みかけの雑誌を片手に、緑色の受話器をとった。

「北村探偵事務所ですか」

わざとおし殺したような低い男の声だった。

「そうです」と北村も低い声で答えた。

「北村さんはいますか」

「この事務所はわたしひとりきりでしてね」

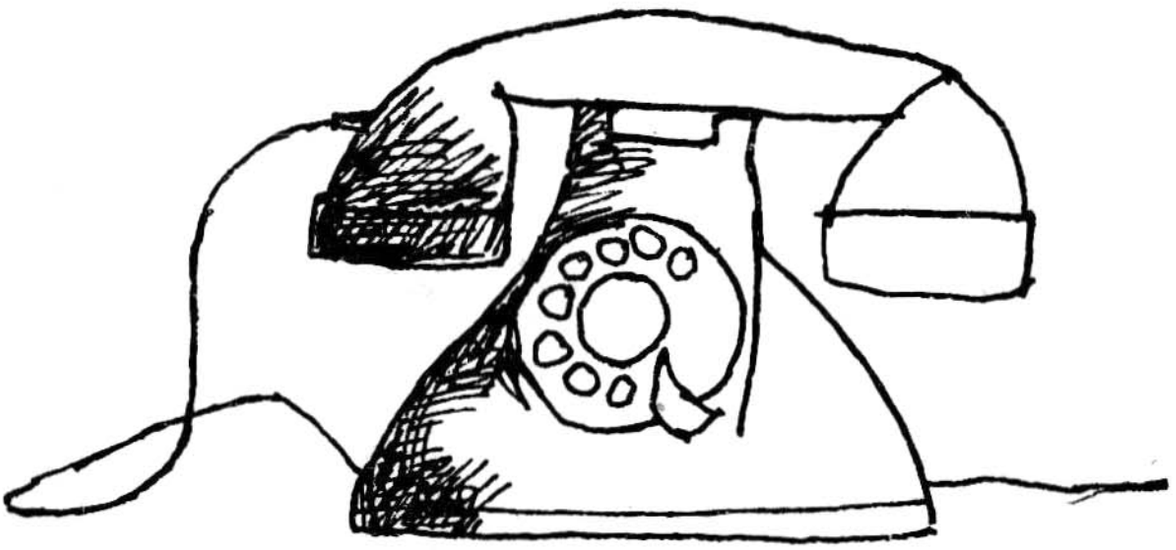
低いふくみ笑いが聞こえて、男の声が急にぞんざいになった。

「そうだと思ったが。そのオフィスはどこかね」

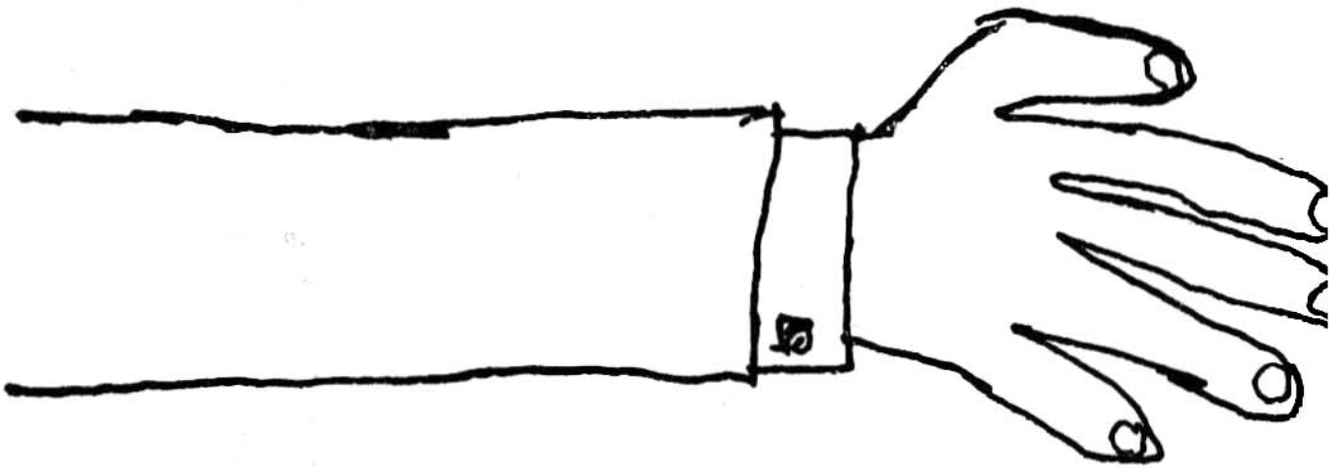
「電話帳見たなら、わかってるはずだが……」

「番地はわかってる。江戸橋二丁目六番地だ。そこへ行く目標はなにかね。ぼくはあんたの客かもしれないんだぜ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



「それなら教えよう。昭和通りと日本橋通りのあいだだ」
「それから……」
「あとは番地を見て捜すさ」
「どうも商売熱心とはいえないな。あんたは、車を持ってるかね」
「タクシーなら持ってる。九百万の東京都民と共有でね」
男は一瞬沈黙してから、やはり低い声でいった。「いまの仕事の経験は長いのかね」
「十一年と一カ月と二週間」
「うそじゃあるまいな」
「それから十一年と一カ月を引いてもらおう」
男は高い声で笑った。笑いの残る明かるい声でいった。
「からかってると思ってるらしいな。気にいったよ。そのうち縁があったら、会うとしよう」
電話が切れた。
北村は受話器をおき、また椅子の背によりかかって読みかけの雑誌に眼を落とした。



3

五分近く経ったとき、廊下のドアが勢いよくあいた。はいってきたのは、いかにも精力の溢れたはちきれんばかりの大きなからだの男だった。バラ色の輝くような頬に、よろこび以外のものは見たくもないらしい明かるい生き生きした眸、香油でかためた黒い豊かな頭髪。紺色のダブルの仕事着に、働き者らしい逞しい骨格の上半身をゆったりつつみ、年齢は、三十五、六というところだった。

男は愛想のいい笑顔で北村にうなずきながら、手にさげた大きな赤皮の鞄を北村の机の上にむぞうさにおき、いっそう親しみのあふれる眼つきで、北村を見おろした。北村は堅い椅子のなかでわずか身を引いた。じっとしていては、いまにも男の太い両腕がのびて、手袋のような大きな両手で自分の薄い肩を抱きすくめてくるかもしれなかった。

男は北村を見つめながら、片手で椅子を引き腰をおろした。両手の太い指を机の上で組みあわせ、白い歯をみせて嬉しそうに笑った。

「思ったとおりの顔をしてるね、あんたは。電話の声で想像してたよ。まだ若いな。いくつだ」
北村は無言で男を見つめていた。男はまたちらりと白い歯をみせた。
「おれより三つ四つ若そうだな。三十二、三というところかな」
北村はやはり無表情に男の視線を見返していた。男の推量は北村の年齢に的中していたが、それに答える理由はなかった。男は声をたてずに笑い、二重にたるんだ顎で、うしろのドアをさした。
「探偵、調査、北村事務所か。看板ばかりばかに大きいね。中身がこんな小さなオフィスとはとても思えない」
北村はやっと口を開いた。これ以上黙っている必要もなさそうだった。「看板屋が寸法を間違えたんだな」
「気のきいた看板屋だ。あんた同様にね」言いながらちらと北村の眼のなかを覗きこんだ。急に声をひそめていった。
「得意な仕事はなにかね」
「ひとつだけある。得意げな人間とおしゃべりすることだ」
男は大きくうなずいた。「気のきいた返事だ。その調子で行こう。簡単な仕事なんだが、一日いくらだ」
「仕事の内容による」
男は器用な手つきで内ポケットから二つにたたんだメモ用紙をとりだし、開きながら机の上においた。身を乗りだすようにしてささやいた。
「この女のあとを尾けてもらいたい。一週間ぶっつづけにだ。いくらでやってくれる」
北村は男のおいたメモに眼をやった。小さな白い紙には、細かいきちょうめんな字が二行、書いてあるきり

だった。

港区芝高輪南町、八つ山アパート　五一二号
磯田（滝）千賀子　四十六歳

北村は小さな文字に眼をおとしながら、いった。
「一週間ぶっつづけにといったね」
「そうだ」
北村は眼をあげた。「この女が眠っているときもかね」
男はかすかに笑って、「あんたの判断にまかせる。毎日、時間をきめて報告してくれればいい。報告は電話でいい。いくらだ」
「この括弧のなかの名前は何かね」
男はまた眼で笑った。しかし、返事はなかった。
「偽名ででもあるのかね」
「そこに書いてあるとおりだ」
「この女の職業は……」
「訊く必要がない」

「家庭の主婦じゃなさそうだな」
「すぐわかることだ。半日もあとを尾ければね」
「結婚調査なら、料金は五割増し。離婚なら、倍いただく」
「よかろう。一日いくらだ」
「調査の目的をまだ訊いてない」
男の生き生きと輝いていた眼がかすかに曇った。くびれた顎を引くようにして、いった。
「調査には目的など訊く必要あるまい。気のきいた男が気のきいた調査をするならだが」
北村は無言で男を見つめていた。男はまた身を乗りだし、急に説得するような口調になった。
「住所、氏名、年齢。必要なことはみな書いてある」
「いちばん肝心なことが抜けてる。調査の目的を訊かなくては、動くわけにいかない。だいいち、調査に手落ちが生じるかもしれない」
「あんたなら、だいじょうぶさ」
「お世辞はやめてくれ。人間のあとを尾けるには理由がいる。こっちは商売なんだ。ぶざまな失敗をして、信用を落としたくない」
「あとを尾ける理由か……」
男は嘆息するようにつぶやいたが、何かを思いついたように、急に低い声でうれしそうに笑った。大きな手がすばやく内ポケットにのび、赤皮の大きな財布をとりだした。

「理由はこれでいいだろ」
男は大きな紙幣を一枚、北村の眼の前においた。手の切れそうな一万円紙幣だった。北村は紙幣にちらと眼をやったが、やはり黙ったまま男の顔を見つめた。男の明かるい眼の奥にかすかないらだちが浮かんだ。大きな上体をおこし、盛りあがった肩の凝りをほぐすように二、三度回してから、やや早口でいった。
「これで一週間分というわけじゃない。二日だけ、あとを尾けて、詳しい報告を出してくれ。報告の内容によって、あとの金を渡す」
「この女は何者だね」
「あとを尾ければわかる」
「年齢は四十六か」北村は男の眼を覗きこんだ。「この年齢にはまちがいはないんだろうな」
「戸籍上はそうなってる」
「戸籍など信用できない人間もいるが……」
「海の向こうの話だな。日本では、戸籍の売買はまったくといっていいくらいない」
「こんな貧乏国の国籍を買っても始まらんからな。四十六歳じゃ、この女には子供の二、三人はいる見当だな」
男は答えなかった。大きな両手をまた机の上で組み合わせ、太い指をいら立たしげに動かした。
「どうも離婚問題くさいが……」と、北村はいった。
男は不安そうに微笑した。「離婚ではない」
「では、金か」言ってから、北村はちらと笑った。「もっとも、金の絡んでいない事件はないが……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com